2003/2/23

縄文時代の平山を歩く

千葉市の遺跡を歩く会

緑区平山には縄文中期～後期（5000～3000 年前）に時期を同じくして、３つの大型貝塚が作られました。菱名(ひしな)貝塚、台畑(だいはた)貝塚、築地台(きじだい)貝塚です。平山の地は支川都川（仁戸名川）中流に位置し、貝塚が作られた時代に東京湾に出るためには川を約８km 下らなければなりませんでした。なぜ海岸からこのように離れた場所に大型貝塚が作られたのか、そのわけを想像させる遺物が千葉県文化財センターや千葉市埋蔵文化財調査センターによって発掘されています。この地を歩くことによって、縄文時代の暮らしを考えましょう。

１．　菱名貝塚（縄文中期・後期）　　≪ Ｐ　参照 ≫

- 南北 100m、東西 90mの貝塚。標高 37m。
- 貝層はイボキサゴ、ハマグリが主体。マガキ、シオフキなども見られる。
- 貝塚は馬蹄型を呈しており、平坦な台地上にある。但し、連続した馬蹄形ではなく、貝層が極めて薄い部分がある。開口部は東に開き、延長方向は谷戸に繋がる谷地形を示している。（大部分が畑になっており、貝層の点在を観察することは容易）
- ヤジリ、埋葬されたイヌの骨が出土したことから、縄文人の狩猟が想像される。
- 石皿、すり石が発掘されている。ドングリなどを粉にして調理し、土器で煮たり焼いたりして食べていたことが想像される。
- 軽石製浮石が出土したことから、網漁で漁獲をしていたことが想像される。
- 打製石斧が出土したことから、根菜類を採取する生活をしていたことが想像される。
- 磨製石斧が出土したことから、木を伐採し、住居、種々生活必需品を作成したことが想像される。

２．　台畑貝塚（縄文中期、後期）　　≪ Ｐ　参照 ≫

- 南北 110m、東西 100mの点列環状貝塚。標高 39m。
- 貝層はイボキサゴ、ハマグリが主体。アサリ、シオフキなどもある。
- 磨製石斧、打製石斧、黒曜石。チャート小片など、石器の出土が多い。石器を製作する集落であったことが想像される。

３．　築地台貝塚（縄文中期、後期、晩期）　　≪ Ｐ　参照 ≫

- 南北 110m、東西 110mの大型貝塚。標高 40m。
- 貝層はイボキサゴが主体。ハマグリ、アサリなどがある。
- 開口部は南東に開き、南東部は斜面にも貝層が存在する。
- ヤジリ、打製石斧、石皿などが出土している。菱名貝塚と同様な暮らしが想像される。
- 製塩土器が出土している。霞ヶ浦などで作られた塩を土器ごと入手し、集落に持ち帰ったと想像される。塩を作りに行ったか、物々交換をしたか、塩の入手方法は不明。
- カワウソの骨が出土した。年代は測定されていないが、縄文時代のものでなくとも、この地に広大な森林が存在し、湧き水が滾々と流れていた時期があったことを示唆している。もし縄文時代のものであれば、支川都川を丸木舟で航行するには労力が必要だったことが想像される。遡上する際は舟を漕ぐのではなく、陸上から縄を引っ張らざるをえない場合があったことも想像される。そうまでして貝殻付の貝を川の上流で食用にすることに「なぜ、なぜ、？」という言葉が湧いてきます。

４．　仁戸名川の縄文時代遺跡

表のように，上流域・中流域・谷奥部（上流域）の 3 か所に遺跡が集中しています。中期には拠点的な広場をもつ集落が２つくらいできる例が，加曽利北と南，有吉北と南などよく知られています。仁戸名川水系にも同じような例が３つも存在したようです。後期には中流域と谷奥部に大きな集落がありました。

仁戸名川谷は，村田川水系の谷奥部と，また都川水系の谷奥部と接していています。２つの大きな水系の結節点にあり，中流域と谷奥部の遺跡集中箇所は，交通の要所であったものと考えられます。最近の研究で，都川谷奥部にある誉田高田貝塚と多部田（たべた）貝塚の後期の貝は，村田川河口の海で採取されたものがあることがわかってきました。

今回踏査する３つの貝塚の貝は，これまで都川河口から運ばれたものと考えられてきましたが，分水嶺を越えて生実の谷付近で採取された可能性があります。もしかしたら，今回の踏査で確認できるかもしれません。

参考・縄文中・後期貝塚の貝種組成比較　（都川水系：村田川水系）

イボキサゴが最多であることは共通
都川水系：　　ハマグリは二枚貝の半分以下，シオフキよりアサリが多い
村田川水系：　ハマグリは二枚貝の半分以上，アサリよりシオフキが多い